

災害支援・教育復興にむけて

つなぐ



日教組災害対策本部

〒101-0003

東京都千代田区一ツ橋 2-6-2

HP:<http://www.jtu-net.or.jp/>

2度目の連合ボランティアに参加して（第19次）

日教組中央執行委員 西中 幸子

派遣団に遅れること1日、盆明けの16日に岩手県大東町にある旧丑石小学校に設置された連合のベースキャンプに入った。今回で2度目の連合ボランティアである。1度目は4月末から5月初めにかけて釜石と大槌町に入った。7日間津波にのまれた民家や駐車場の泥かきを行った。今回も同様のことと思っていたが、少し違っていた。陸前高田市のボランティアセンターと、大船渡市の漁港近くの側溝の清掃活動であった。日教組は3班に分かれての活動であった。申し訳ないが、私たちの班で行動したことのみを書かせていただく。



陸前高田市のボランティアセンターには水道がなく、近くの川からポンプを使い水をタンクに汲み上げること、支援物資が詰め込まれていた倉庫を片付け、機材を使いやすく収納すること、作業中のボランティアからの要請で補充機材を配達することなどを行った。

配達途中で目にしたのは、震災から5ヶ月経過した陸前高田の町並みだった。かつての海岸線がどこであったのか想像することすらできなくなっていた。津波に流された跡地は、地盤沈下で海水が

たまり、復興には程遠い状況が眼前に横たわっていた。5階建ての建物と同じくらいの高さに積まれた、文字通りの瓦礫の山は、少しだけ分別されてはいたが、いくつも海沿いに並び、山裾には変形した車が何百台も隙間なく並べられていた。1本だけ残った松は、少し茶色っぽくなっていたが、幹にはブルーのシートがかけられ手当を受けているようだった。

被災された人たちは、仮設住宅などで生活を送っておられた。日々の生活に必須の食料や生活用品を扱うスーパーマーケットも津波に流され、建物と屋



上の看板だけが残っていた。連合の構成組織である日本サービス・流通労働組合連合（JSD）傘下のスーパーマーケット「マイヤ」は、人的被害を含め、甚大な被害を受けていたが、数箇所の仮設店舗で営業を行っていた。ボランティア期間中、連日作業後ベースキャンプに帰る途中で、「マイヤ」に寄り、買い物をした。最後の日には、お土産に岩手県の銘菓「かもめの卵」を大量に購入する人もいた。ボランティアだけでなく、被災地の経済的復興に少しはお役に立ったのだろうか。大船渡市の側溝の清掃は、JSDからボランティアに来ておられた方々と一緒に作業した。JSDと日教組男性部屋が同室であったこともあり、親密な関係が築けた。作業は屈強な鉄の集団、日本基幹産業労働組合連合会（基幹労連）とも一緒であった。2日間にわたっての作業で、側溝1キロメートル以上を清掃することができた。慣れた手つきで、基幹労連の方々は側溝のコンクリートのふたを開けていく。私たちはシャベルで泥や砂利をかきだし土嚢に入れる。ガラス片やコンクリート片を集めていく。被災した冷蔵倉庫の復旧工事も行われていた。その周辺の溝掃除の時には、まだ腐敗臭が強く、泥だしをしていると秋刀魚の骨だけが重なって出てきたり、箱入りのマグロの赤身がでてきたりした。側溝が詰まって水が流れないため、この会社の方も周辺に住んでいる方々も長期にわたってつらい思いをしてこられたことが想像できた。



私たち連合ボランティアは30人ほどで作業をしていたが、最後の日には、他のボランティアグループが加わり60人ほどになった。作業はどんどんすすみ、倉庫前によどんでいた泥水は、排水溝から川へ、そして海へと流れた。基幹労連の方々はまた、慣れた手つきでコンクリートのふたを戻していった。

今回は期間が短く申し訳ないように思う。ボランティアの内容も時々刻々変化している。新たな課題が次から次へと生まれてくる。ボランティアは被災地支援というより、自分のために行うものだとつくづく感じさせられた。自然の猛威、人間の慢心、日常の貴重さ、そして仲間の大切さを私は再認識させていただいた。

今もそしてこれからも、被災地に必要なことは雇用の創出だ。働く場を作り、賃金を得て、生活する。子どもを育てる。野菜を作る。魚を獲る。家族と一緒に暮らす。当たり前な日常を1日も早く取り戻すために、何が必要か、何ができるのか、何をすればいいのかを考え続けていこうと思う。

